

挫折から立ち直る

[聖書]列王記上 19章 1~18節

アハブは、エリヤの行ったすべての事、預言者を剣で皆殺しにした次第をすべてイゼベルに告げた。イゼベルは、エリヤに使者を送ってこう言させた。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあの預言者たちの一人の命のようにしていなければ、神々が幾重にもわたしを罰してくださるように。」それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シェバに来て、自分の従者をそこに残し、彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」

彼はえにしだの木の下で横になって眠ってしまった。御使いが彼に触れて言った。「起きて食べよ。」見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入った瓶があったので、エリヤはそのパン菓子を食べ、水を飲んで、また横になった。主の御使いはもう一度戻って来てエリヤに触れ、「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ」と言った。エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。

エリヤはそこにあった洞穴に入り、夜を過ごした。見よ、そのとき、主の言葉があった。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。

それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」

主はエリヤに言われた。「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたなら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王とせよ。ニムシの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とせよ。またアベル・メホラのシャファトの子エリシャにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ。ハザエルの剣を逃れた者をイエフが殺し、イエフの剣を逃れた者をエリシャが殺すであろう。しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」

[序] エリヤの豹変

エリヤは旧約聖書を代表する預言者です。イエス・キリストが山の上で神の子の栄光の姿を現された時、ペトロたちは律法を代表するモーセと預言者を代表するエリヤが現れて、主と語り合う光景を示されています(マタイ17:3)。エリヤはキリストよりも870年以上も昔、北王国の第7代の王アハブと唯一人で対決した預言者です。

アハブは地中海貿易で栄えるフェニキアの王女イゼベルと結婚しました。彼女のお蔭で富と文化がフェニキヤからもたらされて王国は豊かになりました。イゼベルは都のサマリヤにバアルの神殿を建て、自分の国から大勢の預言者を呼び寄せて、バアル信仰を強引に広めようとしたようです。夫のアハブも彼女に追従して、バアルの祭壇の傍らに豊饒の女神アシェラ像を造りました。

そこで主なる神は、**大飢饉**という裁きを王国に下しました。エリヤは神の命によって飢饉を預言すると、王の追及から2年間身を隠します。しかし飢饉が続く3年目に王の前に再び現れて、バアルとアシュラの預言者 850 人と主の預言者として生き残った自分と、**カルメル山で対決**したいと申し入れました。そして集まって来た民に向かって問いかけました。「あなたたちは、いつまで **どっちつかずに迷っているのか**。もし主が神であれば主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え」。

薪の上に雄牛一頭を裂いて載せ、祈りを捧げます。どちらの神が**火をもって祈りに答える神**でしょうか。まず**バアルとアシュラの預言者 850 人**が祈り始めました。彼らは大声をあげ、祭壇の周りを跳び回って祈りました。昼過ぎからは、剣や槍で体を傷つけ、血を流してまで狂ったように叫び続けましたが、**火の答え**はありませんでした。エリヤの番です。彼はイスラエル 12 部族を表す 12 の石を築いて祭壇を修復し、薪を並べて雄牛を切り裂いて載せました。更に水を十分に注いだ上で祈りました。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、**主よ**。あなたがイスラエルにおいて神であられることが、今日明らかになりますように。**主よ、私に答えてください**。そうすればこの民は、**あなたが神であることを知る**でしょう」。すると主の火が降って、エリヤが捧げた献げ物を薪・石もろともに焼き尽くしました。民は皆ひれ伏して「**主こそ神です**」「**主こそ神です**」と叫びました。そこでバアルとアシュラの預言者は民によって皆捕らえられ、キシオン川で**殺されて**しまいました。更にエリヤは、山頂に登って祈りました。すると海の彼方から雲が湧き上り、**激しい雨が降り**始めました。大飢饉が終わりを告げ、救いがもたらされたのです。国を救う主の**預言者エリヤの輝かしい大勝利**でした。

ところが王妃**イゼベル**は激しく怒り、「明日のこの時刻までにお前を殺す」と伝えてきました。彼女は男まさりの強い女性で、夫のアハブを引き回して政治に介入していたようです。例えばアハブがサマリアの宮殿に隣接する**ぶどう園**が欲しくなり、所有者の**ナボト**に是非譲ってくれと交渉しました。しかし先祖からの**嗣業の地**だからと断られて、しよげてしまいました。するとイゼベルが、王の名でナボトを裁判にかけ、2人の偽証人を雇ってナボトが神と王を呪ったと言わせて**死刑**に処し、土地を取り上げて夫のものにしてしまっています(列王上 21 章)。このような悪事を平気で行う人でしたから、自分の大事な預言者たちを皆殺しにされて、**怒り心頭に発して**、エリヤの命を同じようにしてやると息巻いたのでした。

するとそれを聞いたエリヤは、「**恐れて直ちに逃げた**」のです。カルメル山から 160km、ユダの最南端ベエル・シェバまで来て、弟子とも別れて荒れ野を一日歩き続け、えにしだの木の下に座り込み、**死を求めて**祈りました。「主よ、もう十分です。**わたしの命を取ってください**」(19:4)。

皆さん、このエリヤの**豹変ぶり**を、どのように受け取られますか？ 国王に向かって、一人で 850 人のバアルとアシュラの預言者との対決を申し出て、民衆に「主こそ神です」とひれ伏させる**勝利**を勝ち取ったエリヤです。更に祈りをもって**雨を降らせ**、3年続いている大飢饉から**国を救った**エリヤです。イゼベルの脅迫に対しても、堂々と立ち向かって行けたはずではないでしょうか。**イゼベルの一喝**に恐れおののいて逃げ出し、「わたしの命を取ってください」などと泣き言を吐くエリヤに、どう

してなってしまったのでしょうか？

[1] 信仰の挫折

私たち夫婦が札幌教会にお仕えしていた頃のことです。北海道の帯広を中心にした地盤から出ている中川一郎という自民党の政治家がいました。「北海のひぐま」と呼ばれる豪放さと強烈なリーダーシップで中川派という派閥をつくり、いつかは総裁・総理になるかもしれないと期待されていました。ところが1982年10月の自民党総裁選挙に打って出て善戦した後で、突然札幌のホテルで自殺してしまいました。当時札幌で暮らしていた私たちは、北海道中の大きな衝撃を今でも忘れることが出来ません。

新聞には「荷おろしうつ病」(今日では燃え尽き症候群とも言われています)ではないかという精神病医の言葉が載っていました。総裁選挙という大変な仕事が終わり、ホットした時に襲ってくる空しい思い、孤独感、過労や心労からくるストレスで眠れなくなり、心身の状態が低下して、うつ状態が進行したのだらう言われました。

人々は指導者に、強さ・偉大さを期待します。当人もその期待に応えようと努力します。そして期待する指導者像がふくらんで、独り歩きを始めます。その虚像と実際の自分とのギャップが広がるほど、本人はつらくなります。「派閥のリーダーとして今後もやっていけるだろうか」「眠れない・体力気力が衰えた・こんなことが人に知れたら、ガッカリされ、見限られてしまうのでは」という不安と恐れが、中川さんの心の中で大きくなって、死んでしまいたい思いに強く襲われたのだらうと、言われていました。

しかしエリヤの場合は中川さんとは違います。中川さんは総裁選挙で敗れました。エリヤは異教徒の預言者850人を全滅させる決定的勝利を勝ち取り、民衆に正しい信仰を取り戻させたのです。その上、雨を降らせて、大飢饉からも国を救うことが出来たのです。二重の決定的勝利を得たのです。イゼベルを恐れることなどなかったのではないのでしょうか？

しかし現実のエリヤは、イゼベルの脅迫に恐れ戦いて、直ちに逃げ出したのでした。アハブの強さには勝てたけれども、イゼベルの強さにはとても勝てないと恐れたのでしょうか。違います。エリヤの勝利は、主なる神ご自身の勝利です。エリヤの強さではありませんでした。エリヤは自分をお用い下さる主なる神を信じ、祈りつつ主の働きをさせていただいて、主なる神の勝利を現して来たに過ぎません。その信仰に立ち続ければ、イゼベルに対しても立向かうことが出来たはずです。ですから私は、エリヤの逃亡を、彼の信仰の挫折と受けとめます。エリヤともあろう信仰者でも、このように突然信仰が挫折して、責任を捨てて逃げ出し、死にたいと泣き言を漏らしてしまうことがある。まして私たちは---と受けとりました。でも神は、そのようなエリヤをお見捨てになりませんでした。彼を再起させ、新しい任務を与えて、再び送り出して下さったのです。その点を私たちは、今日の聖書からしっかり学び取らなければならないと思います。

[2] エリヤの立ち直り

エリヤはベエル・シェバまで逃げて来ると、従者とも別れて一人荒れ野を歩き続け、一本のえにしだの木の下に座り込みました。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません」。祈り終わると安心したのでしょうか。彼は横になって眠ってしまいました。

やがて彼は天使に起こされます。そしてパンと水を与えられ、また眠りました。天使が再び彼を起こし、パンと水を与えました。元気を回復したエリヤは、それから40日40夜歩き続けて、昔モーセが十戒を与えられたシナイ半島のホレブの山にたどり着きました。

洞穴に入って夜を過すエリヤに神の声がありました。「エリヤよ、ここで何をしているのか」。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています」。「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」。

激しい風が吹き、地震が起こり、火が燃え上がりました。その後でエリヤは静かにささやく声を聞きます(19:12)。「エリヤよ、ここで何をしているのか」。彼は同じ答えを繰り返します。「行け、あなたの来た道を引き返せ」。神は彼がなすべきことをお命じになりました。その上で大事なことを約束なされたのです。「わたしはイスラエルに 7000 人を残す」。エリヤは神のこの約束に励まされて、逃げてきた道を引き返し、命じられた通りに務めを果たしたのです。

ある人が、「子供の時日曜学校で見た紙芝居から、エリヤという人は大きな強い預言者だと思っていたが、後で旧約聖書を読んで、彼がとても気の小さい人だったとわかってびっくりした」と言っていました。そうですね。王と大勢の人々の前で、バアルの預言者 850 人を相手に一人で祈り、真の神さまをあかしするなど、並みの人間には出来ません。本当に信仰の強い偉大な英雄です。ところが素晴らしい勝利を得ながら、次の瞬間には臆病風に吹かれて、遠く国外まで逃げて、「もう十分です。わたしの命を取ってください」などという泣きごとを、どうして言ったのでしょうか。イゼベルこそ諸悪の源なので、ここで彼が簡単にイゼベルに負けて殺されてしまえば、神の勝利は帳消しになってしまいます。だから神は必ずエリヤを守ってくださるに違いありません。エリヤは恐れることなどなかったのではないのでしょうか。

彼は、えにしだの木の下で「もう死なせてください」と祈った後で眠ってしまいました。天使がパン菓子と水を用意してくれました。目がさめてそれを腹に入れると、また横になって眠ってしまいます。彼が疲労困憊だったことが分かります。どうしてそんなにくたくたな状態になっていたのでしょうか。この後で元気を回復すると、40日40夜歩き続けてホレブ山まで行ける体力が彼にはありました。だからベエル・シェバまでの 160kmが遠すぎて、体が疲れ切ってしまったのではなさそうです。

そこでわかることは、恐らく彼は、カルメル山での対決と雨乞いの祈りに、信仰のありったけと命のありったけを、注ぎ尽くしてしまったのです。彼の中には何も無くなって空っぽになってしまった。一

方大敗北したはずの**イゼベル**はびくともしないで更に脅迫してきます。権力を握る者の強さに、彼は**自分の無力さ**を痛感させられて、イゼベルに立ち向かう**信仰も気力・体力**もなえてしまい、ただただ怯えて少しでも遠くに逃げることしか出来なかったのではないのでしょうか。これも一種の**荷おろしうつ病**といえると思います。

神はこのようなエリヤに**睡眠と食事**をたっぷり与えて**先ず体力の回復**を待ちました。それからモーセが十戒を与えられたホレブの山、イスラエル民族が**神の民**として整えられた**原点**に戻って、エリヤ自身の**信仰の再出発**をするように導かれました。その時エリヤは**静かなささやく声**として、神の語りかけを聞いています。劇的な大活躍でヒーローを演じた彼に、**落ち着いた静かな心**を取り戻すようにして下さいなのです。

その上で神は、これから**何をしたらよいか**を具体的に**アドバイス**します。そして最後に神は、彼が決して**ひとりぼっちではないこと**、志を同じくする人を少数でも必ず残されていると約束して下さいました。エリヤが「仲間がみな殺されてわたし一人だけが残し、しかもわたしも殺されようとしています」と繰り返し神に訴えているからです。「自分一人だけになってしまった」。これはすごい**ストレス**です。でも神は「違う。あなたは一人ぼっちではない。わたしはイスラエルに 7000 人を残す」とおっしゃったのです。7000 人が多いのか、少ないのか。聖書は**少数者**ととっているようですが、でも一人とは全く違います。心強いかぎりです。

こうしてエリヤは**自殺願望の危機**を乗り越えて、主なる神の預言者としての活動に戻って行けたのでした。

[3] 静かにささやく声

ベエル・シェバまでの 160kmを若者一人を連れてとぼとぼ歩いていくエリヤは、あの**カルメル山の英雄**とは余りにかけ離れた姿でした。「一体どうしたの！ エリヤ、あなたは強い人のはずです。引き返しなさい。イゼベルと対決しなさい。彼女こそ倒さなければならぬ神の敵です。あなたはアハブ王に勝ちました。主なる神がついていて下さるのです。女王にも必ず勝ちます。**頑張れ！**」。私だったらこんな励まし方をしたに違いありません。

でもカルメル山で彼をあのようにお用いになった**神**は、エリヤをそのまま **逃げる**にまかせました。あきれ果てて**見捨てた**のではありません。彼が横になって眠りに落ちたら、天使を送り焼きたてのパン菓子と水を枕もとに備えて下さいました。優しく起こして食べさせ、また眠り続けると、再びパン菓子と水を与えて、彼の**元気を回復**させておられます。

神は本当に**優しい方**ですね。すっかり**自信を失った彼**にくどくどお説教しておられません。打ち叩いて強くなれと鍛錬なさいませぬ。お説教も鍛錬もそれを受けとる**元気さ**がなければ**逆効果**です。「**死んで楽にさせてください**」というエリアの祈りをだまって聞きながら、神は彼を天使に守らせておられます。**大切な配慮**ですね。ゆっくり時間をかけて休養を取るうちに、元気が回復して来ました。

すると神は**原点に戻る作業**をおさせになりました。**イスラエルの信仰**を守ろうと戦って疲れ果てたのですから、ホレブの山すなわちモーセまで戻り、**民族の信仰の歩み**を振り返って見ることをおさせになったのでしょ

うです。人生の壁にぶつかって自分を見失った時、すっかり混乱してどうしたらよいか分からなくなったら、**人生の振り出しまで戻って**、自分がどのように育ってきたかをたどり直してみる。ああこんな風にして育ってきたから、今のような自分があるのだな—と自分が分かってきます。あの時自分は**どうしてあのようにしたのか**。別のやり方はなかったのかと考えるようになります。

と同時に自分をこのように生かして下さった**多くの人の愛、神の恵み**も見えてきます。そして最後に、神が自分をどのように**お用いになろう**としておられるかが示されて来るのではないのでしょうか。この時の神の語りかけが「**静かにささやく声**」(静かな細い声〈口語訳〉a still small voice〈KJV〉)と表現されています。何と素晴らしい表現でしょうか。私たちは静かなささやく声に導かれて、**心が鎮められて深く内省し、大事なことに気付いていく**のです。

神はエリヤに「そこを出て、山の中で**主の前に立ちなさい**」(10:11)と言われました。**洞穴から出て独り神の前に立つ**—**自分の殻の中に何時までも閉じこもって**は、**新しい声は聞こえ**ません。自分の殻から出なければなりません。誰からも邪魔されず**神の前に独りで立つ**時に、私の魂に語りかけてくださる**神の静かにささやく声**が聞こえてくるのです。

[結] 救い主キリストと共に

以上、今日は旧約聖書を代表する偉大な預言者**エリヤの挫折**を学びました。どんなに豊かな才能を与えられていたとしても、どこかに**脆さを秘めているのが人間なのだ**なということをとしみじみ思います。皆さんはいかがですか。

でも神は、**優しい愛**をもってエリヤを**立ち直らせて**、更にお用いになりました。有難いことです。政治家の中川さんも、この愛の神と深くつながっていたら、エリヤのように再起できたに違いありません。残念です。

エリヤから 870 年後、神はその愛と救いの恵みを、**イエス・キリストの生涯・十字架と復活**によって、世の全ての人々に、はっきりと現わして下さいました。神がどのようなお方か、イエス・キリストが現して下さいている—これが **新約聖書の証**であり、私たちの信仰です。

キリストはガリラヤ湖で働く漁師のペテロたちを弟子にされました。彼らは **主をお乗せして湖を横断した時、突然激しい嵐に襲われ、舟が沈みそう**になりました。それまで自分たちが働いてきた我が家の庭のようなガリラヤ湖のはずです。でも彼らは**動転**してしまいました。「**主よ、助けてください。おぼれそうです**」。眠っていた主は起き上がり、嵐を静めて下さいました。そして彼らは無事に向こう岸に着きました(マタイ8章)。

復活されたキリストとの出会いによって弟子になったパウロが、フィリピの監獄に囚われていた時、突然の大地震で監獄の扉も鎖もみな壊れました。看守長は囚人たちが逃亡したと思い、自殺しようとして、「自害してはいけない。私たちは皆ここにいる」。自分たちの利益を守るためにパウロを逮捕させた商売人たち。しかしこの世の理不尽な迫害の最中でも、獄の中で歌うパウロの賛美と祈りを、囚人達が皆聞き入っていたのでした。そして看守長一家までも皆、救われました(使徒言行録16章)。

イエス・キリストを救い主と信じる者は、エリヤ以上にはっきりと、愛の神が共に居て、守り導いて下さることを、信じる事が出来ます。弱さ・もろさを秘めている私たちですが、どんな挫折からも立ち直らせていただけるのです。

何もかも投げ捨てて、逃げ出したいと思う時、エリヤに寄り添って下さった愛の神、イエス・キリストにご自身を現して下さった愛の神を、思い起こしましょう。そして神の静かにささやく声を聞きとりましょう。皆さん、信仰の恵みを豊かにいただく者になって参りましょう。

祈ります:神さま、今日はエリヤを通して、誰しもが内に秘めている弱さ、脆さを自覚させられたことを、感謝します。私たちの人生には、挫折が付きものです。何もかも放り出して、逃げ出したくなる、死にたくなつた時に、神さま、あなたがどのようにエリヤに寄り添い、彼を立ち直らせて下さったかを、心に留め直して、あなたを信じ、あなたにわが身を委ねて、癒して頂き、挫折から立ち直らせて下さい。またお互いに、弱さ、脆さを持つ者として、支え合って生きていく者にして下さい。イエスさま、あなたの霊、聖霊のお導きを切にお願いします。このお祈りを、主イエス・キリストの御名によって、お捧げします。

アーメン